村上田長について

○川嶌眞人[1]・今永正樹[2]
武吉　攻[2]・村上玄児[2]

中津の医家、村上家七代の玄水については既に前学会にて報告したが、今回は九代、田長について述べてみたい。

村上田長は、天保十年（一八三九年）、秋月藩の御典医、杉全健甫の三男として生まれた。幼名を又玄といい、中島衡平の塾にて陽名学を学んだ。非常な勉強家で藩校「稽古館」の文庫所蔵本を読みつくしたという。

万延元年（一八六〇年）、村上家の八代、春海と養子縁組がととのい、杵築の元田伯倫（竹渓）の塾に入門、塾頭となった。

元治二年（一八六五年）、村上春海の娘、述と結婚し、家督相続が許されて、田長と改名した。慶応三年（一八六七年）、中津藩の選抜留学生として、藤野玄洋とともに大阪医学校で医学を学んだ。

明治元年（一八六八年）、奥羽征伐の出兵に軍医として参加、その時の写真が村上家に残っている。

後の京都新聞の初の社主である村上作夫と元田伯倫の塾で出会った田長との間には、熱烈な友情が芽ばえ、二人は耶馬渓の古刹羅漢寺境内の「指月庵」で「水雲館」という学舎をひらくことになる（明治七年）。翌八年、学生の数も増加したため、羅漢寺山麓の跡田に、鎮西義塾という校舎を新築し、隆盛時には、学生二百名を数えたという。

明治九年、田長を社長とし、増田宋太郎を編集長として「田舎新聞」が創刊される。今回の調査で、田長の「開社の祝詞」という原稿が発見され、新聞を発行するに至った理想が高らかに述べられている。

「夢ナル哉、夢ナル哉、人間一生ノ大夢、明治九年ノ今日今日に至リ世上ノ有為転変、生者必滅ノ大機関ヲ観ジ来ルニ、戊辰ノ兵乱アレハ己巳ノ改革アリ、乙巳ノ落謄アレバ、今日の結果アリ、北隣ノ喧嘩ハ南隣ノ戒トナリ、裏店ノ失火ハ表家ノ用心ヲ重ヌ、一上一下一顛一起、物変リ星移リ一ノ文明開化ノ看板標目ヲ掲示スル者ハ、新聞紙是也……」

編集長の増田宋太郎は四ヵ月後に西郷隆盛に呼応して挙兵し、中津隊の同志八十名とともに、鹿児島で討死してしまったため、その後も田長は苦労をしながらも週刊紙として発刊を続けた。

富士紡社長として大正期の実業界の大御所として高名な和田豊治は、青年期に田長の医局生として村上家に住み込み、中学に通った。貧乏な豊治に学問をさせるため、村上作夫に頼んで現京都新聞の通信員という名目で月々二十円送金してもらうことになり、これによって豊治は慶応義塾に通うことができた。

村上作夫の書簡が多数村上家に残っているが、「新聞原稿を送って来ない……」と田長に注意を促す手紙もあって三人の人間関係を知るのにおもしろい。

豊治は田長の十三回忌に当って「豊治小少父ヲ失ヒ、扶養誘掖、一二之ヲ先生ニ仰グ。先生ハ実ニ師父ノ恩人ニシテ、豊治ノ今日アルモノ、実ニ其ノ賜ナラズンバアラズ」と追慕謝恩の辞をささげている。

豊治は、田長の恩に報いるべく田長の四男村上巧児のため、あらゆる援助をおしまず、巧児は期待に応えて、西日本鉄道社長、井筒屋デパート社長として西日本財界の大御所となった。

明治十八年、田長は教育者としての活動を評価されて、大分中学（現上野ヶ丘高校）の初代校長に就任する。同時に師範学校校長も兼任した。

明治十九年、田長は玖珠郡長に任命された。田長は内陸の地、玖珠郡の発展のために、豊後森―中津間の道路整備を企画した。

反対運動も起こるなか、県の土木技師らと共に草鞋ばきで実地測量をし、住民の説得にあたったが、県議会の予算否決という苦境に陥りながらも、独力で資金を集め、心血を注いで難工事をすすめた。

明治二十三年、竣工も間もないという時期に突如として郡長非職の発令があった。県会の議決を無視し、地元の力で工事続行に対する反対一派の策謀からであろう。田長は即日、中津に引き揚げてしまった。村上家の思想として共通する理想に対するひたすらな情熱と実行力は、村上玄水の解剖でもみられたが、田長に至っては、医学の道というよりも、教育者、政治家として顕著にあらわれたようであ

る。

中津に帰った田長は、医師として、コレラ流行（死者六七人）の医療活動を行ったり、絵筆、作詩、画賛をたのしむ日常であった。

宮永村の「松瀬園」に田畑を耕し、半農半医の晩年をおくったと四男巧児は書いている。

村上田長は、明治初頭の激動期を医人としてのみならず、理想と現実につまずきながらも情念に燃えた志士として生きざるを得なかったひとりの医者の生涯を示してくれた。

（1）川鳥整形外科病院　（2）村上医家資料館

本邦に全身麻酔を伝えた高嶺徳明の事蹟

松木明知

1

従来、日本における全身麻酔の鼻祖は、紀州の華岡青洲とされてきたが、昭和三十三年沖縄の歴史学者東恩納氏によって、琉球の高嶺徳明なる人物が、青洲を遡ること一一五年も前に全身麻酔術を用い補唇の術を施行した事蹟が発掘された。

これによって高嶺の業績は、識者の注目を集め、沖縄出身の医史学者金城氏も高嶺について言及し、さらに沖縄の本土復帰に際して、沖縄の医学調査を施行した鹿児島大の佐藤八郎教授も高嶺の業績の再認識を訴えた。しかし高嶺の主要な業績は、全身麻酔法であるにもかかわらず、専門の麻酔科学から観た研究はなかった。